

84. 八日市市建部瓦屋寺遺跡 出土の遺物について

夜臼式土器発見の経過

八日市市西部は場整備事業が、昭和53年9月1日より開始された。その範囲は八日市市北部の木戸川排水工事に伴い行われるもので、瓦屋寺山（白鹿山ともいわれていた）麓から東へ近江鉄道に至る耕地で、建部瓦屋寺町全域と建部日吉町の一部が含まれている。

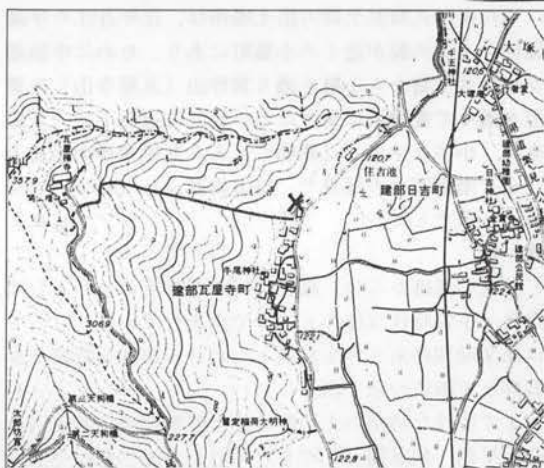
私は従前より瓦屋寺山上にある聖徳太子創建の古刹といわれる瓦屋寺について、その山麓で焼かれた伝承の古代瓦につき興味を抱いていたが、特に地名等について、古老の話や古文書古地図により調査を行っていた矢先のことであり、千載の一遇とばかりこの工事を見守っていた。

たまたま9月26日掘り起こされた耕土の中から布目平瓦の一片を発見したのを契機に、地元の郷土歴史研究グループ建史会の協力も得て多数の土器（須恵器）や蓮華文軒丸瓦の破片を発見することができ、併せて参道の麓で二基の瓦陶兼業窯跡を確認することができたのである。

同年10月10日小字カマエ（窯前）の市道より東へ25mの地先で縄文式土器（長さ1.5cm、巾1cm、厚さ0.4cm）の破片3個が出土、更に同所の市道直下の道路肩（新設排水路の掘削工事による削掘面）に折り重なるように、つき出ている縄文式土器の破片数十個を発見した。昭和54年6月3日のことである。その破片は同月18日には百個を越え、併せて、サヌカイト破片数個、やじり（石鏝）1個を採集した。地点は市道路面より



瓦屋寺遺跡の近景



遺跡位置図

1 : 20,000

100~120cm下で灰色青みを帯びた土層（淡灰色混礫砂質土）であった。この断層を東北に追っていくと3mばかり落ち込んだところがあり、そこより口縁部に帯状肥厚のある夜臼式土器類似の、高さ40cm、巾30cm（推定）の種つぼと思われる破片1個分。更に口縁部に帯状肥厚のないカメ（推定高さ30cm、巾30cm）の破片の大部を同年7月1日発見した。また落込の中からも同土器破片が50個出土した。その落込は、深さ37cm、巾35cm、長さ50cmで、堆積している土は、茶色の黄みを帯びた砂まじり土層であった。

ちなみにその断層は市道盛土32cm、黒灰色土層（耕作土）25cm、黒灰色で黄みを帯びた土層13cm、暗黒褐色土層12cm、黄茶色粘土砂まじり土層礫入25cm、灰色の青みを帯びた土層20cmで、夜臼式土器類似の土器はこの土層から出土した。

遺跡の位置

この地帯は、神崎郡永源寺大字杜葉尾を起点とする県内でも五指に入る愛知川（別名玉作川また下流を神崎川という）は瓦屋寺山麓より東へ1kmのところを北流しているが、その伏流水が山根にあたり処々に湧出し、浜野沢や吉住池また伊野部沢となっている所謂湿地帯である。

近く北の山隣には白鳳4年瀬田へ遷座されたと伝承される建部神社の千草原といわれる宮跡があり、瓦屋寺山麓並びに近くの平地には百基をこえる古墳群があり往古の隆盛さを窺うことができる。

なお山並は北東に伸び南東に面した瓦屋寺山麓は日照よく潤沢な水に恵まれ稲作に営々としたさまや、夜白式類似土器の出土によって当時の有力者の指図の姿が彷彿される。

建部日吉町は小高い地帯で肥沃な耕土に恵まれている。

遺跡

この夜白式類似土器の出土場所は、往年近江の守護職佐々木氏の館が近くの小脇町にあり、ために中仙道が一時武佐富から小脇を通り箕作山(瓦屋寺山)の東辺を通って愛知川に至ったといわれる道路下で、瓦屋寺町「小字カマエ」(竊前)にある瓦屋寺禅寺参道入口より南東25mの地点で、市道表面より145cm下の土層より出土した。(※)

遺物

瓦屋寺遺跡からは、縄文時代の遺物をはじめとして、奈良・平安時代以降のものまで出土している。ここでは縄文晩期終末～弥生前期といわれる微妙な時期の土器群と石鏃について紹介したい。

まず微妙な時期の土器群を弥生前期初頭、あるいは弥生早期(創草期)とでもして壺から述べる。

壺形土器(写真1の1～9、写真2の7、10)

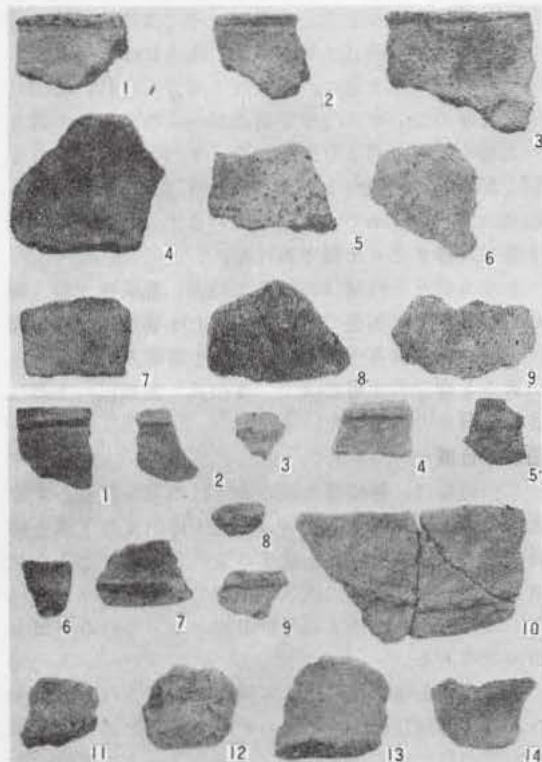
多数にのぼる破片のうち、2、3に限定するが、まず写真1の1、2、3は壺の口縁であるが、口縁端部

がわずかに外反しながら玉縁状に丸く取められており、頸部にかけては横ナテ整形をうけている。胎土は砂層を含み粗いが、器面は元来灰白色であったらしく、現在黄味を帯びた白っぽい灰色である。壺2の口縁は壺1とやや異なり玉縁というよりも丸味を帯びた断面三角形に近い肥厚をみせるシャープな口縁である。壺3は頸部から肩部まで残存しており、これら壺形土器の全器形をおぼろげながら復元することが出来る。この想定によると肩部は段状に張り出し、わずかであって、腹部もまたほとんど張り出すことなく長細くなり底部もぎこちない丸底きみの平底であったと思われる。なお、他の六点は壺の破片であるが、うち4、7、8は口縁(1～3)の胎土、色調と明瞭に異なり、特に壺の破片4、5は黄褐色を呈して、胎土中に金雲母や角閃石を含む一般に「河内産」といわれるものであった。特に壺4は、その頸部から肩部にかけての破片と思われるもので河内からの搬入品としてこの器形ともども注目されるものである。

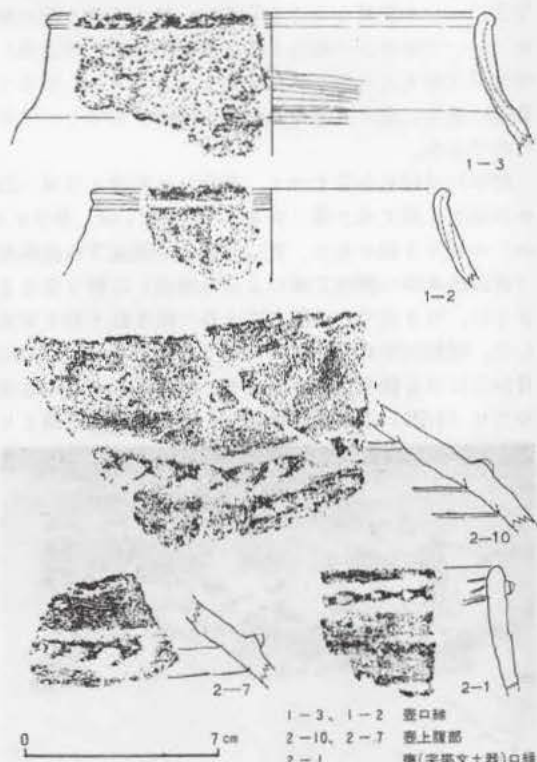
壺(写真2の7、10)は大型壺の肩部に相当し、最大腹部の上方をめぐる凸帯であり、上から工具で押圧している。

甕形土器(写真2の1～6、8、9)

甕の1、2、8は明瞭な口縁部であり、いずれも突帯を直下にめぐらしている。他の3、4、5、6、9



土器 上:写真1 下:写真2



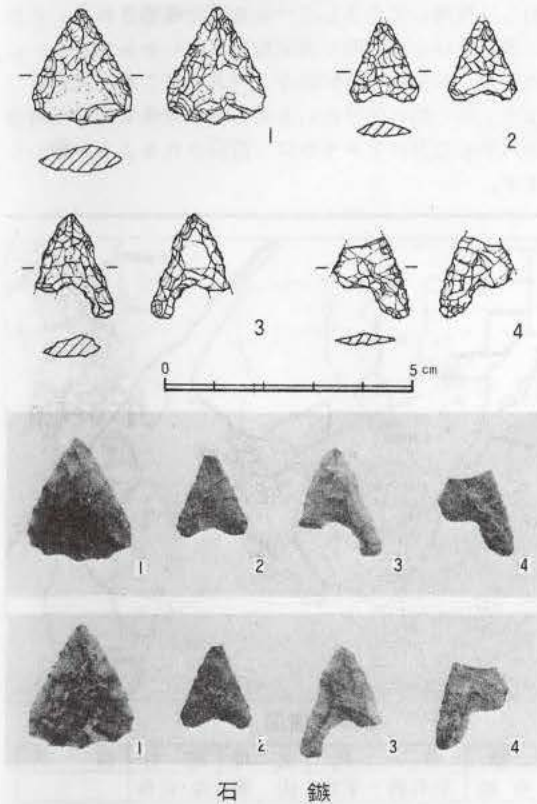
1-3、1-2 壺口縁
2-10、2-7 壺上腹部
2-1 壺(天橋文土器)口縁

土器拓本 実測図

は突帯をもつが肩部のものと思われる。甕1では巾6～5mm、高さ4～1mmのきわめて細い突帯が口縁端から7～5.5mm下方に一条めぐっており、突帯は上からへら状工具によっておよそ1cm間隔に押圧され、波状となっている。また口縁端は平坦ではなく丸味をもち、その厚みおよそ6mmであった。突帯から下部にかけては特に著しい調整手法など観察できない。甕2は上方からの傾斜辺が長い三角形の断面を呈する凸帯をもち、いわゆる凸帯が薄く垂れ下った状態を示すものである。口縁端部は端面が全くなく、先細りとなって尖頭形の断面をもつことになる。突帯下方には甕2同様明瞭な調整痕がない。

甕8は小片であるが、突帯文土器にふさわしいやや重厚な突帯がめぐっている。すなわち、突帯の巾は約9mmと広く、高さは4～1mmと低いが、丁寧な押圧によって「刻目」を付している。口縁端も平坦ではないが隅丸状におわずかに丸味をもつのみで厚みも6.5mmとおわずかに厚いものである。

なお、写真2の11～14は底部であり、14を除いて剝離が大きく形状は確かではない。底部14は底径4.2cm前後と小さく平坦である。しかし、底面上方で最もくびれ、さらに上方へ広がっている。このくびれは粗雑しくへらで削り込んだ痕が残り、特異な底部を形成することになっている。



胎土にすぐれて特徴的なものはないが、甕1は褐色味を帯びており、底部11もこれにやや近い。また、甕5は出土地点をやや異にするものであるが、焼も硬く、胎土に含まれる粒子もやや細かい。

これらの所見をまとめると、甕2に代表される凸帯からみてこれら一群の土器は縄文晩期といえども最終末のものであり、すでに稲作が日本列島に伝わって以降のものとして出ることが出来る。壺形土器の存在もまたこのことを雄弁に物語っているといえよう。その時代は、板付1式が近畿へ伝わる直前頃か、それに相当する時期である。

石 鋏

大谷巖氏によってサヌカイト製の無茎石鋏四点が採集されている。うち基部の一部が欠失しているものもあるが、その形態から平基式(1)、凹基式(2、3、4)に分類されそれぞれ1点と3点がある。2、4は表裏とも調整を行ない、3は表面に、1は表裏に大剝離面を残している。周縁は鋸歯状に細部調整をほどこし、従って断面の形は2、4は菱形、3は五角形、1は六角形を呈する。2、3は基部に抉りを入れV字またはU字形のわたくりをつくり出しているが、4は一方の脚部について意識的に欠いたものである。

重量 1：約1.5g 2：約0.43g 3：約1g
4：約0.35g

むすびにかえて

日本列島における弥生文化、すなわち水稻農耕文化の開始は、大陸・半島に最も近い北九州の沿岸、遺跡名でいえば福岡市板付遺跡、唐津市菜畑遺跡で知られている。両遺跡とも夜臼式土器と板付式土器が共伴する水田址が発見され、さらにその下層から夜臼式土器のみの出土する水田址が発掘調査されている。この夜臼式と板付式土器で弥生文化の開始を物語る重要な点は、縄文式土器のなかではほとんど知られていない、種粳を貯蔵する大型壺の出現をみることである。その多くは美しく飾るためにつくられたもので、板付遺跡での最古の壺類の多くは、焼成前に粘土に朱を混ぜて焼き上げており、また、壺の器面に朱を塗りつけたものも多かった。このことは、壺の中に収めて、春先まで保管する粳が、秋になって必ず赤い穂先を出し、豊



かなお米を稔らすようと穀に祈りをささげるとともに、このように丹を塗りこめて呪術としたと考えられる。このため、壺の出現は縄文時代の狩猟と採集の生活から脱皮し、生産経済に入った証しといえる。とれたものをすぐに、すべて口にしてしまう社会と異なり、貯蔵し、成長をまって生活の糧を得ることになった新しい社会は、われわれ祖先の大きな意識の転換期であったにちがいない。

なぜ近江に、なぜこの瓦屋寺山の山麓に、この新しい思想が、生活が受け入れられたのか。たしかに近江は、瀬戸内海の最奥部であり、東へ東へと進んできた文化が落ち着く場所であったのかもしれない。また、愛知川の埋め残したこの山麓部の吉住の溜は、そのよしわらが水稻農耕の場を提供したことも事実であろう。しかしなお、愛知川流域あるいは近江そのものの魅力は別個のところにあったのかもしれない。

この瓦屋寺遺跡の発見によって、従来考えられていたよりより早くから、この近江で農耕文化が始まったことが明らかにされるとともに、ただ単なる文化の東漸ではなく、きわめて点的に一足とびに、北九州わけでも有明湾方面から文物の交流によって、人々の往来によってもたらされたものではないかと思わしめた。この点からも、従来漠然と考えられてきた弥生文化の伝播について大きな反省を迫ることになったにちがいない。

愛知川流域の文化受容の不思議さはこれのみではない。瓦屋寺山の特異な壜墳式石室、竜石山の横口式石室、石塔寺の三重石塔、どれを取りあげても渡来文化に彩られているといえる。なお文末ながら石器の実測にあたられた岡本隆子、写真撮影に手をわずらわした寿福滋両氏に感謝の微意を表したい

(※ 大谷 巖 ※※ 丸山竜平)

昭和55年度

85. 新刊〈滋賀県遺跡目録〉の紹介

埋蔵文化財の保存と調査、研究に欠かせない基礎的な資料は、いうまでもなく「遺跡目録」「遺跡台帳」と呼ばれるものである。

県下では昭和40年度の目録が、従来完備した唯一のものとして重要な役割を果たしてきた。しかし、それ以後、15年の歳月がたち、その間に新たな遺跡の発見も加わり、その改訂版が永らくかつ望されていたのである。このため滋賀県では各市町村の埋蔵文化財担当者の協力を得て、数年を要し作成してきたものである。遺跡の数も昭和40年度の2015箇所比して55年度版で

は2864箇所を数え、各個所中の個々の遺跡数を取りあげると今や8000箇所に達するものと思われる。

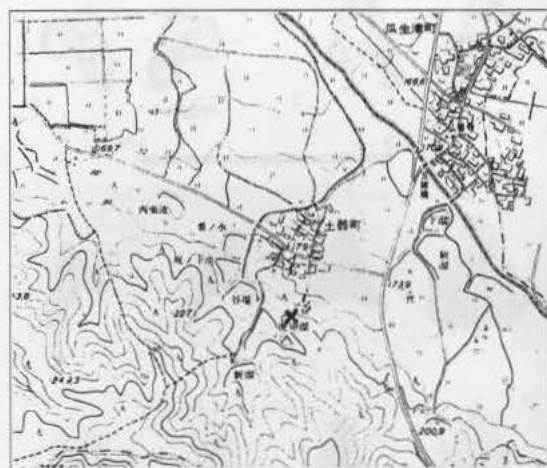
しかし、これらの遺跡数は、目下各市町村で進められている遺跡分布調査によって一層増加するであろうし、各市町村の試掘調査を含む開発のチェックによってもなお遺跡の発見は見込まれるのである。

新たに発見された遺跡は、すみやかに活字にして周知し、保護の手をさしのべる必要が痛感される。それは遺跡目録が不変的な決定版ではないからである。このため、新発見の遺跡紹介コーナーをこの「文化財だより」の一面に設けたいと考える。埋蔵文化財の情報入手した方はすみやかにご投稿されるようお願いいたします。

86. 庚申溜遺跡の発見

昭和56年12月～57年1月にかけて、八日市市域内の布引山山系で、溜池を中心とする石器散布地の分布調査が実施された。この調査は市内在住の大谷巖氏を中心に現在も断続的になされているものである。洪積世台地や丘陵上での溜池内の旧石器遺跡の発見は、兵庫県等で特に著しい現象であるが、これを参考に県下の各地でも調査が試みられている。このようにして発見されたものが下表の遺跡であるが、ここでは、チャート質のナイフ型石器と思われるものやコア状のものも採集されている。また、須恵器や土師器も散布し、複合遺跡であって、溜池の北側に集落址が存在するものと思われる。

(丸山竜平)



遺跡位置図

1 : 20,000

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	時代	立地	地目	備考
72	庚申溜遺跡	八日市市土師町天ノ谷	散布地	旧石器～平安	山腹	池・山林	